

「手作りの冊子」と「^{くえいっしょ}俱会一処」

ペンネーム やなさん(昭和 39 年機械科卒業)

皆さん、2026年の正月はいかがでしたか。そしてどんな目標を立てられましたか？

さて、2020年12月に白血病に罹患し余命5年と宣告され退院した経過観察中の親友がいます。傘寿を迎え、体力の衰えと闘いながら毎日を過ごしている様です。昨年末で5年が経過しました。余命5年と言っても、それは医学統計学上の数値であるだけの様に思われます。

そして、彼との約束である「手作りの冊子」は休む事なく続け、三種類で合計36冊が完成しました。こ



の冊子の印刷ページは約 A4 判 4000 ページ近くになりました。

この手作り冊子は関東同窓会の50周年の記念大会でリーフレットと合わせて展示し、これを始めた経緯を紹介させて頂きました。そこでは次の様に説明しています。こんな親友(心友・信友・真友)が一生に一人位はいてもいいですね。

退院の後、ある時、彼と快気祝いの一杯をやりながら、次の様な事を誓い合いました。

「俺は、何時までかは分からないが、あなたの最後まで付き合おう。余命を意識しての生活は実感できないが、兎に角1日1日を有意義に楽しんでいこうや。協力するぜ」

それにはどうしたら、良いのか。

彼は以前から、新聞や雑誌のスクラップを作っていました。新聞なら毎日読むし、その日その日の社会の話題も記録されている。そうだ！その日の生きた証を残そう。新聞の記事等の切り抜きを毎日メールで私に送る。それを私が編集してそちらに返信する。それを私の趣味でもある自作製本道具を使って、記事が100ページになったら冊子を作成する。そして送り届ける。「これをやり続けよう」という事になったのです。この冊子は毎回一冊だけを製本します。それは、どちらかが旅立った時は、他方がその冊子を保管する。後に旅立つ者は、それを棺に入れて天国に持っていくという事を約束したのです。そこで再会し、それを観ながら、「一杯やろうぜ」という事にしたからです。

大晦日の夜、彼は「12月に義兄の葬儀に参列し、告別式の僧侶の法話の中で『俱会一処(くえいっしょ)』という話があった」と話してきました。やはり死後の世界を意識して生活されている様ですね。私は仏教について詳しくはないのですが、初めて聞く言葉でしたのでネット検索をしました。

「**俱会一処**」とは、『仏説阿弥陀經』に出てくる「**俱(とも)に一つの処(ところ)で会(あ)う**」というご文(もん)で、同じ阿弥陀さまのお浄土でまた共に会わせていただくという意味です。「俱会一処」とは、浄土教の往生の利益の一つです。阿弥陀仏の極楽浄土に往生した者は、浄土の仏菩薩たちと一処にであう事ができるという。浄土真宗では、念仏の信仰に生きる人は、この世の命が終わるとただちに浄土に生まれる。そこで墓碑に「俱会一処」と刻む事がある……。とありました。引用:浄土真宗の基礎より



阿弥陀如来坐像



墓碑の一例

この仏教の教えと我々が今続けている「唯一無二の手作り冊子」の発想がなんとなく似ている様に思いました。私が極楽浄土に行き阿弥陀仏に会う。そこにいる彼と持参した冊子を見て、生前を語り合うという事に。その為には極楽浄土に辿(たど)る事ができる様な生活をして行く必要があります。それには何をしたらよいのかを考えながら今年

は過ごそうと思いました。新しい年早々に「死後の話」で、すみませんでした。

皆さんが今年も明るい年で過ごせます様にお祈り致します。でわ又。

唯一無二の手作りの冊子

昭和 39 年機械科卒業

柳澤今朝雄

この冊子を作るに至った訳をお話します。

この話の中に出てくる彼は昭和39年以来の半世紀以上にもなる付き合いのある友人です。

趣味や人生観などは多少異なっているものの、なぜか物事の価値観ではどこことなく共通となる点が多々あります。

その彼は3年前に白血病に罹患し、闘病の後、余命5年と告げられました。現在は抗がん剤治療を終了し、経過観察の生活をしています。

彼の趣味は自然（特に植物）を観察する事とコントラクトブリッジをする事です。少し前に亡くなった衆議院の細田議長と一緒にブリッジの会で対戦した事があったそうで、かなりの腕前の様です。

そして本日展示のこの冊子。

2022 年 2 月 18 日から作り始めて 2 年半以上になります。

退院した時、彼と快気祝いの一杯をやりながら、次の様な事を誓い合いました。

「俺は、何時までかは分からないが、あなたの最後まで付き合おう。余命を意識しての生活は実感できないが、兎に角 1 日 1 日を有意義に楽しんでいこうや。協力するぜ」

それにはどうしたら、良いのか。

彼は以前から、新聞や雑誌のスクラップを作っていました。新聞なら毎日読むし、その日その日の社会の動きも記録されている。「そうだ！その日の生きた証を残そう。新聞の記事等の切り抜きを毎日メールで私に送る。それを私が編集してそちらに返信する」それを私の趣味でもある自作製本道具を使って、記事が 100 ページになったら冊子を作成する。そして送り届ける。「これをやり続けよう」という事になったのです。

本日展示したこの手作り冊子は、4 種類の内の一部です。諸々合わせると 3000 ページ近くになります。

この冊子は毎回一冊だけを製本します。それは、どちらかが旅立った時は、他方がその冊子を保管する。最後に旅立つ者は、それを棺に入れて天国に持っていくという事を約束しました。そこで再会し、それを観ながら、「一杯やろうぜ」という事にしたからです。

今、これを手にとって頂いた皆様に、この冊子の「出来栄え」ではなく、「こうした約束もあるのか」という、目では見えない事をより強く実感して頂ければ、こんな嬉しい事はありません。

こんな訳で、この手作りの冊子は唯一無二だったのです。

本日は、これを手にして頂き有難うございました。

趣味の手作りの製本道具と冊子

